

# 看護学生の職業的アイデンティティ形成に関する研究（第一報） — 看護学生の対人援助能力 —

新見 明子<sup>1</sup>, 黒田 裕子<sup>1</sup>, 合田 友美<sup>1</sup>  
小薮 智子<sup>1</sup>, 岡野一伸子<sup>2</sup>

## A Study about Formation of Professional Identity for Nursing Students (1st report) — Interpersonal Helping Ability of Nursing Students —

Akiko NIIMI<sup>1</sup>, Yuko KURODA<sup>1</sup>, Tomomi GODA<sup>1</sup>,  
Tomoko KOYABU<sup>1</sup> and Nobuko OKANOICHI<sup>2</sup>

キーワード：看護学生，職業的アイデンティティ，対人援助能力，教育

### 概 要

看護の質を向上させる方法の1つとして個々の看護師の職業的アイデンティティを確立することが求められている。看護学生においても職業的アイデンティティの形成は必要である。今回看護学生に、看護職の職業的アイデンティティの形成に関わると考えられる対人関係援助能力について、横断的・縦断的調査を行った。その結果、対人援助を専門とする職業でありながら、対人関係の基本的要件である人に対する基本的信頼感が十分に備わっていない学生も看護を志しており、適切な人間関係を築きながらケアするための心理・社会的発達の未熟さがあることがわかった。しかしながら、3年間の教育課程が進み、卒業時には対人関係援助能力は高まって来ていることから、教育の中での支援の重要性が示唆された。

### 1. はじめに

看護職では、看護の質を向上させる方法の1つとして個々の看護師の職業的アイデンティティを確立することが求められており、そのために、看護師の職業的アイデンティティ尺度の開発<sup>1-3)</sup>、理論の開発<sup>4)</sup>や離職の問題<sup>5)</sup>、看護学生の職業的アイデンティティの獲得の現状<sup>6,7)</sup>に関するものなど幅広く検討されている。しかし、これらの既知の研究では、看護基礎教育から卒後教育において、職業的アイデンティティの低下や揺らぎに対するサポートの必要性は指摘されつつも、それに対する効果的な介入に関する研究成果は少ないのが現状である。

看護職はケアという行為を通して、自己の自立を維

持しつつ他者の自立のために援助的役割を担う。このケアという役割を担う対人援助者について岡本<sup>8,9)</sup>は、ケア役割を担う立場の人々は個のアイデンティティを獲得・発達させつつ、関係性にもとづくアイデンティティを発達させることが重要と指摘し、またこれらは相互に影響しあうと述べている。個のアイデンティティの獲得は、幼少期から自己信頼感と自己肯定感を養い、青年期に「自分である感覚」「社会に役立つ自分」「思想的・価値的な信念」などを模索しながらアイデンティティを獲得していくが、これには職業選択が重要な役割を果たす<sup>10)</sup>といわれている。

一方、関係性にもとづくアイデンティティは、成人期のアイデンティティとして、「他者を世話する」「指導する」など他者とのかかわりの中で発達する<sup>11)</sup>といわれ、個のアイデンティティが自己の自己実現に向かっているのに対してこれは、他者の成長・自己実現への援助という方向で発達する。国眼<sup>12)</sup>は、看護師の事例から自分の働きが人の役に立ち、成果が他者から認められることによって職業的アイデンティティが支えられ、それは個人のアイデンティティの成熟をも促して

(平成18年9月28日受理)

<sup>1</sup>川崎医療短期大学 第一看護科

<sup>2</sup>適性科学研究センター

<sup>1</sup>The First Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

<sup>2</sup>Measurement and Research Services, Inc.

いること、また職業的アイデンティティの発達には、専門職の知識体系の獲得とともに対人関係能力がその基底にあることを指摘している。それは、看護におけるケアという行為の過程が、他者との相互関係のなかで成り立つ<sup>13)</sup>という特性をもつために、この他者との対人関係のとり方が看護実践の成果にも影響するというに通ずる。

したがって、看護職には、良好な対人関係の基盤のうえに成り立つケアという行為を通して関係性にもとづくアイデンティティを発達させ、さらに看護という職業へのかかわりから個人のアイデンティティを発達させるという、両者が統合された成人期のアイデンティティが必要といえる。

この看護職に必要なとされる成人期のアイデンティティは、看護学生においても、職業的アイデンティティを形成していく上での一つの要素といえる。しかし、学生は、専門職としての教育を受ける過程で、いかに選択・統合して看護職としての自己を確立していくかという職業選択を行いながら、青年期の心理・社会的発達課題である個のアイデンティティ獲得を模索するという過程にある。それと同時に、関係性にもとづくアイデンティティの獲得を求められることは、成人中期の「世代性」の達成<sup>14)</sup>を迫られていることとなり、そこには心理・社会的発達の順序性から難しさがある。

そこで、看護基礎教育では、学生がその難しさに向き合い、看護職の職業的アイデンティティの形成が進むように支援が必要である。そのため、どのような教育的支援が必要であるのかを検討するために、看護職の職業的アイデンティティ形成の一要素である関係性にもとづくアイデンティティの発達の基盤となる対人関係における援助能力を調査し、その傾向を明らかにしたので報告する。

## 2. 用語の定義

「アイデンティティ」：自分であること、真の自分などの意味を持ち、他者の中で自分が独自の存在であることを認めると同時に、過去から現在、未来に至る時間の流れの中で一貫した自分らしさを維持できている状態<sup>8)</sup>。(中心的テーマは、自分は何者であるか)

「職業的アイデンティティ」：アイデンティティ概念の一部を構成する職業にかかわるアイデンティティで、職業を通しての自分らしさである<sup>12)</sup>。専門職の名称をつけることによって専門職の独自性や特殊性を示す。

「看護職の職業的アイデンティティ」：看護を通しての自分らしさへの適合感である。看護師である自分の能力を信じ、独自の存在であること認め、看護が自分にあっているという感覚が時間の流れのなかでも変化しないという看護師である自分に対する肯定的な感覚を維持できている状態である。

「関係性にもとづくアイデンティティ」：他者とのかかわりの中で発達していくアイデンティティで、他者の成長や自己実現に向けて方向付けられる<sup>8)</sup>。(中心的テーマは、自分は誰のために存在するのか、誰のために役立つのか)

## 3. 研究方法

### 1) 対人関係における援助能力の特性を捉える尺度の検討

#### (1) 対人援助適性アセスメント用紙の作成

対人関係のなかで看護を遂行する能力を捉えるために、既存の性格検査や人格検査、および職業特性検査を検討したが、既存の尺度では研究の意向を反映しないと考えられた。そこで、心理学研究の専門家と協議を重ね、適性科学研究センターに対人関係の基礎要件である人間に対する基本的信頼の要素と組織の中で職務を推進する要件である思考・行動特性を捉える要素の2つの構造をもつアセスメント用紙 (Interpersonal Helping Aptitude Test : 以下対人援助適性検査) の作成を依頼した。

#### (2) 対人援助適性検査紙の構造および評価<sup>15)</sup>

対人関係の発揮能力の特性を190項目のitemから、『はい』『どちらでもない』『いいえ』の3段階で心的エネルギーを測定するものである。この特性の評価は、以下のパーソナル・コミュニケーション・リレーション・サポートの4つの座標から対人援助能力の適性を捉える。

#### ① 対人関係の基礎要件である人間に対する基本的信頼の要素

[パーソナル・マップ]：自分と自分の関わり方から自分の生きかたを捉えるもので、自己受容性 (自分自身を受け入れ信頼している力) と自己表現力 (自分の気持ちを十分に表現する力) の両軸からなる。両軸の得点により、A : Alive 充実表現型 (自己受容力も自己表現力も高いタイプ)、B : Bystander 自信内在型 (自己受容力は強いが自己表現力は弱いタイプ)、C : Childish 過剰表現型 (自己受容力は弱いが自己表現力は強いタイプ)、D : Dependent 消極表現型 (自己受容力も自己

表現力も弱いタイプ)に分類される。

[コミュニケーション・マップ]:人との関わり方からコミュニケーションのスタイルを捉えるもので、他者信頼力(人を信頼し信用していく力)と対人感受力(対人関係の状況を感じ取る力)の両軸からなる。両軸の得点により、A:Acceptable積極交流型(他者信頼力も対人感受力も強いタイプ)、B:Believable信頼先行型(他者信頼力は強いが対人感受力は弱いタイプ)、C:Careful感受優先型(他者信頼力は弱いが対人感受力は強いタイプ)、D:Difficult消極交流型(他者信頼力も対人感受力も弱いタイプ)に分類される。

② 職務を推進する要件である思考・行動特性を捉える要素

[リレーション・マップ]:集団の中での対人行動のスタイルを捉えるもので、対人行動力(自分から積極的に人に働きかける力)と対人開放性(自分の感情をオープンに表出していく力)の両軸からなる。両軸の得点により、A:Able行動開放型(対人行動力も対人開放性も強いタイプ)、B:Bold行動積極型(対人行動力は強いが対人開放性は弱いタイプ)、C:Changeable対人開放型(対人行動力は弱いが対人開放性は強いタイプ)、D:Delicate抑制定形型(対人行動力も対人開放性も弱いタイプ)に分類される。

[サポート・マップ]:人を援助するときの行動特徴を捉えるもので、対人好感力(人に好感を与える活動性のもととなる力)と現実対処力(与えられた役割のなかで現実に対処していく力)の両軸からなる。両軸の得点により、A:Ambition援助充実型(対人好感力も現実対処力も強いタイプ)、B:Breakthrough対人好感型(対人好感力は強いが現実対処力は弱いタイプ)、C:Commitment現実対処型(対人好感力は弱いが現実対処力は強いタイプ)、D:Defense自己限定型(対人好感力も現実対処力も弱いタイプ)に分類される。これらの座標は、標準値を50とする。

## 2) 研究対象者

横断的調査群:2004年~2005年にK短期大学に在籍した看護学生。有効回答は1年生177名(99%)、2年生176名(96%)、3年生164名(92%)。

縦断的調査群:2003年4月~2006年3月の3年間K短期大学に在籍した看護学生のうち3年間継続して調査できた看護学生。有効回答67名(74%)。

## 3) 倫理的配慮

各対象者に対して、研究目的および内容を説明し、この調査は自由意志により参加するものであり、結果は

個人の評価に関わらないことおよび研究成果の公表において、個人情報機密が保持されることを説明し、同意を得た。

## 4) 調査・分析方法

調査期間は、2003年7月~2006年3月である。調査時期の状況として、2年生は、初めて臨地実習を体験した後であり、3年生は、臨地実習を全て終了した後である。調査は、心的エネルギーを測定することから、研究者が各学年のクラスに出向き、一定の間隔でitemを読み、直感で回答をする方法を採用した。対人援助の個人特性の解析は、適性科学研究センターに依頼した。データの解析にはSPSS Ver.14.0を用いた。

## 4. 結 果

### 1) 看護学生の対人援助特性の傾向

(1) 横断的調査にみる各学年間の傾向(表1)

1年生の得点から入学当初の看護学生の特徴を見ると、パーソナル・マップでは、自己受容性、自己表現力が標準値に対しともに低い。コミュニケーション・マップでは、他者信頼力、対人感受力ともにやや高い傾向にある。リレーション・マップでは、対人行動力、対人開放性はほぼ標準である。サポート・マップでは、対人好感力は高いが、現実対処力は低い傾向にある。次に、2年生の特徴は、パーソナル・マップの両軸がともに低く、コミュニケーション・マップでは、他者信頼力が高い。また、リレーション・マップは標準値に近く、サポート・マップは、対人好感力はやや高いが、現実対処力は低い傾向にある。

3年生の特徴は、パーソナル・マップは両軸ともやや低いものの標準値に近く、他はやや高い傾向を示した。そのなかでもコミュニケーション・マップの他者信頼力は非常に高い傾向にあった。

1年生と2年生を比較すると、リレーション・マップの対人開放性が2年生に有意に高い( $p<0.05$ )が他に有意差はなく、似た傾向を示していた。2年生と3年生の比較では、自己受容性、自己表現力、他者信頼力、対人行動力、対人開放性、現実対処力の4領域6項目の得点が3年生は有意に高く、異なった傾向にある。また、1年生と3年生においても3年生が、対人感受力、対人行動力以外の4領域6項目に有意に高く異なった傾向を示していた。

(2) 縦断的調査における傾向(表2)

対人援助特性の傾向の変化を明らかにするために、学年を追って調査した。その結果1年次と2年次の比

表1 横断的群学年別対人援助適正得点の傾向

学年	パーソナル・マップ		コミュニケーション・マップ		リレーション・マップ		サポート・マップ	
	自己受容性 mean±SD	自己表現力 mean±SD	他者信頼力 mean±SD	対人感受力 mean±SD	対人行動力 mean±SD	対人開放性 mean±SD	対人好感力 mean±SD	現実対処力 mean±SD
1 (n=177)	41.2±19.5	39.1±17.8	54.2±23.1	54.4±5.8	53.5±10.5	50.7±7.2	55.5±6.0	47.5±8.2
2 (n=176)	39.5±19.1	41.1±19.7	58.8±22.4	53.7±5.9	51.6±9.8	52.3±6.5	54.2±6.8	47.0±8.4
3 (n=164)	48.7±19.7	47.7±20.0	66.7±20.0	54.0±6.1	54.1±9.6	54.2±6.5	53.7±7.0	49.5±7.9

標準=50 \* : p&lt;0.05, \*\* : p&lt;0.01

表2 縦断的群学年別対人援助適正得点の傾向

(n=67)

学年	パーソナル・マップ		コミュニケーション・マップ		リレーション・マップ		サポート・マップ	
	自己受容性 mean±SD	自己表現力 mean±SD	他者信頼力 mean±SD	対人感受力 mean±SD	対人行動力 mean±SD	対人開放性 mean±SD	対人好感力 mean±SD	現実対処力 mean±SD
1	37.1±15.8	39.8±17.4	55.8±22.2	53.1±5.3	50.4±9.7	51.6±7.3	54.2±6.2	45.6±7.5
2	36.6±18.2	39.8±18.5	59.9±22.1	53.4±4.9	49.6±10.1	52.4±6.5	54.0±6.6	46.1±8.1
3	46.1±19.1	42.2±18.2	64.1±21.1	54.6±5.4	52.2±9.6	53.9±5.6	54.4±6.5	49.5±7.6

標準=50 \* : p&lt;0.05, \*\* : p&lt;0.01

較では、コミュニケーション・マップの他者信頼力が2年次に有意に上昇している(p<0.05)以外は、ほとんど変化がなく、1年次と2年次は似た傾向にある。しかし、2年次と3年次の比較では、自己受容性、他者信頼力、対人行動力、対人開放性、現実対処力が3年次に有意に上昇している。

次に、1年次、2年次、3年次のパーソナル、コミュニケーション、リレーション、サポートの各座標の得点分布を図1に示す。

まず、パーソナル・マップでは、分布傾向から個人差の大きいことがわかり、Aタイプは少なく、Dタイプが多い。また、自己受容性、自己表現力の両軸あるいは一方が非常に低い学生が存在することも特徴である。2年次には、この傾向が若干分散するが平均値はほとんど変化がなく、3年次では、Aタイプが増加し、両軸の得点が30以下の低値群が減少している。

コミュニケーション・マップでは、他者信頼力は分散が大きく、人を信頼できないタイプの学生から、相手を尊重し相手を受け入れることがスムーズにできる学生まで様々である。それに比べて、対人感受力は、最小値42～最大値66間に分布し、分散が少なく、相手の感じ方をキャッチする力や対人関係の状況をつかむ力は、ある程度備わっている傾向にある。2年次は、他者信頼力の得点が全体的に上昇しているがこの傾向は変わらない。3年次では、他者信頼力がさらに上昇したためDタイプがほとんど見られなくなり、学生のコミュニケーションのとり方が徐々に上手くなる傾向にある。

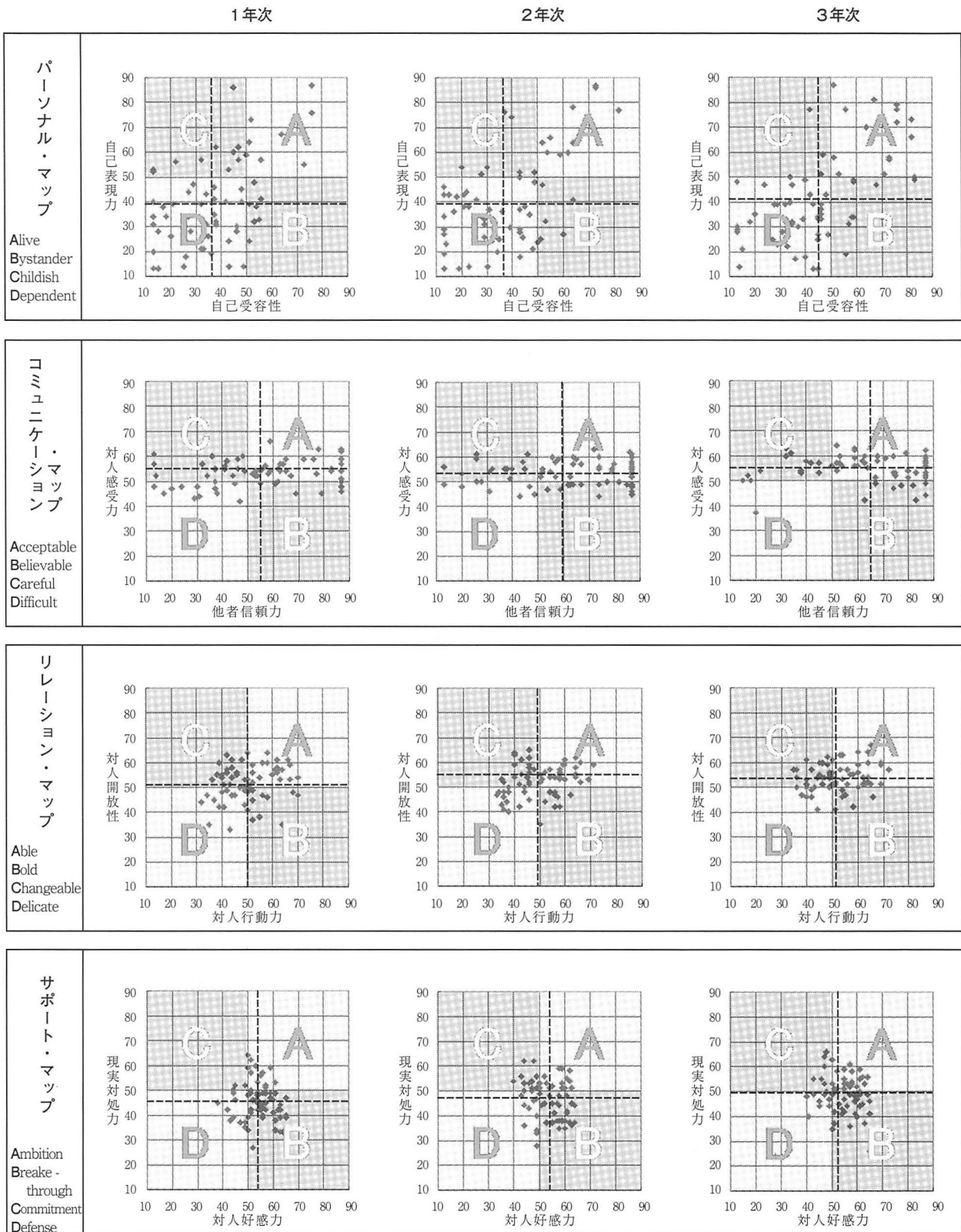
リレーション・マップでは、1年次から3年次まで似た分布傾向にあるが、1年次がやや分散し、3年次の対人開放性の分布は集中している。対人行動力、対人開放性がともにやや上昇したことによりDタイプは減少している。

サポート・マップでは、平均値を中心に分布しており、3年次の現実対処力の平均値が上昇しているものの1年次から3年次まで似た傾向にある。

## 5. 考 察

K短期大学に入学してきた学生の対人関係における援助行動の特性は、対人関係の基本的要件からみると、個人差はあるがパーソナル・マップの自己受容性・自己表現力がともに低い傾向にあることから、自分に対して自信が持てない自尊感情の低い学生が多いといえる。また、コミュニケーション・マップにおける対人感受力はある程度平均的に備わっているが、他者信頼力のばらつきが大きいことから、人間関係の中での状況をつかみ取る力はあるが、なかには他人を信頼しにくい傾向の学生がいることがわかる。このことから、人間関係を築くことに難しさを体験していたり、今後体験しやすい傾向にある学生が多いと考える。人間の心理・社会的発達の課題では、人に対する基本的信頼感の獲得は乳児期の課題であり、青年期ではアイデンティティの獲得が課題である。岡本<sup>8)</sup>は、人の世話をし、他者の成長や自己実現へ向けて援助を行う役割を担うためには、個としてのアイデンティティが形成されていることが前提であると述べている。しかし、現





\* n = 67, 検査結果の解析及びマップへの展開は適正科学研究センターによる、----は平均値を示す

図1 縦断的調査群の学年別推移

実の学生は、個としてのアイデンティティを獲得していく時期でありながら、乳児期の課題である基本的信

頼感が育っていないことが伺える。このことから看護学生は役割上、人の世話をするための心の準備として

成人期という次の「世代性」を期待されているものの、ケア役割をになうために必要な心理・社会的な発達が発達していないかと思える。

組織のなかで看護という職務を推進していく能力の側面では、リレーション・マップは、対人行動力および対人開放性はともに標準よりやや高く、分散もあまり大きくないことから、集団の中ではまずまず自分の感情を出しつつ人に関わることができる。サポート・マップでは、人を援助するときに必要な対人好感力は平均よりやや高く、生き活きとしたはつらつさなどよい印象を他人に与える思考・行動特性を持っている。しかし、現実対処力は平均よりやや低い傾向にあり、仕事をしっかりと受け止め現実の課題に対処しようとする力が弱いため、相手から信頼を得にくいといえる。これらから、看護職の職務を推進していくためには対人関係が基盤になるにもかかわらず、より良い対人関係を進めていこうとする力が十分に備わっているとはいえない。

したがって、看護教育のなかで学生が対人関係における援助行動に必要な特性を獲得していく過程を支援することが重要となる。すなわち、人間関係の基本となる基本的信頼感を獲得できていない学生に対し再獲得に向けての働きかけを行うことと勤勉性を高めて現実対処力を伸ばしていく必要が示唆された。

各学年の対人援助の行動特性の比較から見ると、1年生と2年生ではあまり違いは見られなかったが、3年生は、他の学年より対人援助力の高い傾向にあり、違う特性を持っていた。それは横断的調査・縦断的調査のいずれも同じ傾向であり、3年次の学生は対人援助能力が高まってきているといえる。その要因としては、2年次の学習では臨地実習が3週間あるものの、学内での講義・演習がほとんどであり、対人関係も限定したなかでの関わりでしかない。しかし、3年次の学習では医療施設や訪問看護ステーションなどを含む6ヶ月余りの多様な臨地実習を体験している。そのなかで、年齢、性、相手の置かれている立場など様々な人と関係をとっていかねば実習は成り立たない。そこで学生は、苦慮しながら人との関係作りを努力したり、臨地の指導者および教員の指導や患者の反応を真摯に受けとめたりすることで対人援助能力を発達させたと思える。

グレッグ<sup>4)</sup>は、看護職としての職業的アイデンティティを確立していくうえで、ケア対象者から看護実践の承認を得ることが必要であると見出している。看護

実践は、看護者と患者の対人関係のうえに成立することから、学生においても同様なことがいえる。つまり、関わる患者、指導を受ける看護師や教員から、適切な対人関係のうえに成立した看護実践の承認を繰り返すことは、看護師を目指す学生の個のアイデンティティ形成および職業的アイデンティティを確立していくうえで重要となる。

K短期大学では、1年次における調査で、基本的信頼感が低迷していたことから、コーチングを取り入れたり、臨地実習指導において個人面接を行ったり、学生の個を重要視した関わりを実施してきた。その結果、基本的信頼感の自己受容性や他者信頼力が高くなったとも考えられ、今後はその効果の具体的な検討が必要である。

## 6. 結 論

看護学生の職業的アイデンティティを形成していく上で、その形成の一要素と考えられる対人関係における援助能力を調査した。その結果、看護職は、対人援助を専門とする職業でありながら、対人関係の基本的な要件である基本的信頼感が十分備わっていない学生も看護を志していることが窺え、適切な人間関係を築きながらケアするための心理・社会的発達の未熟さがあることがわかった。また、援助するときの行動特性である現実対処力もやや低く、入学時には、看護を志している学生たちではあるが、対人関係の援助能力は十分備わっているとは言い難い。しかし、3年間の課程のなかでは、対人援助能力は高まり、その要因としては臨地実習での体験が影響していると考えられた。さらに、教育の中で個の承認を繰り返し行うことによって、基本的信頼感の獲得や看護職の職業的アイデンティティの形成を進めていくのではないかと考えられた。

## 引用文献

- 1) 波多野梗子, 小野寺杜紀: 看護学生および看護婦の職業的アイデンティティの変化, 日本看護研究学会雑誌16(4): 21-28, 1993.
- 2) 岩井浩一, 澤田雄二, 野々村典子, 石川演美, 山元由美子, 長谷龍太郎, 大橋ゆかり, 才津芳昭, N. D. パリー, 海山宏之, 宮尾正彦, 藤井恭子, 紙屋克子, 落合幸子: 看護職の職業的アイデンティティ尺度の作成, 茨城県立医療大学紀要6: 57-67, 2001.
- 3) 佐々木真紀子, 針生 亨: 看護師の職業的アイデンティティ尺度の開発, 日本看護科学学会誌26(1): 34-41, 2006.

- 4) グレック美鈴：看護師の職業アイデンティティに関する中  
範理論の構築，看護研究35(3)：196—204，2002.
- 5) 柴田久美子，松下由美子：就職2年以内に退職した新卒看  
護師の職業的同一性形成の検討，日本看護研究学会雑誌25  
(3)：229，2002.
- 6) 松下由美子，荒木美千子，木村 周：看護学生の職業的同一  
性形成に関する研究—同一性地位面接による分析—，神  
奈川県立衛生短期大学紀要26：15—22，1993.
- 7) 安藤祥子，内海 滉：看護学生の自我同一性に関する研究  
—職業的同一性形成を規定する教育的要因—，日本看護研  
究学会雑誌18(3)：7—19，1995.
- 8) 岡本祐子：アイデンティティ論からみた生涯発達とキャリ  
ア形成，組織科学33(2)：4—13，1999.
- 9) 岡本祐子：ケアすることとアイデンティティの発達，「女性  
の生涯発達とアイデンティティ」岡本祐子編，京都：北大  
和書房，pp. 143—178，1999.
- 10) 鎌幹八郎：「アイデンティティの心理学」，東京：講談社現  
代新書，1990.
- 11) 岡本祐子：「中年からのアイデンティティ発達の心理学」京  
都：ナカニシヤ出版，pp. 40—52，1997.
- 12) 国眼真理子：女性の職業意識の発達とアイデンティティ  
「女性の生涯発達とアイデンティティ」岡本祐子編，京都：  
北大和書房，pp. 113—134，1999.
- 13) Peplau HE，稲田八重子他訳：「人間関係の看護論」，第1  
版，東京：医学書院，1973.
- 14) Erikson EH，小此木啓吾訳編：「自我同一性」アイデンティ  
ティとライフサイクル，新装版，東京：誠信書房，1982.
- 15) 適性科学研究センター：看護における対人援助適性アセス  
メントシステム解説書，1999. 2003.

